

---

# 無類の吸血鬼

しもべ妖精

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無類の吸血鬼

### 【コード】

N0065H

### 【作者名】

しもべ妖精

### 【あらすじ】

一人の吸血鬼、何年生きてか覚えてない。同族を助け、人も助け、すべてを見てきた。そして、学園へとやってきた。長寿吸血鬼の最強ものです。NGな方はやめといたほうがいいかも。基本は本編通り。傍観とか修行相手とかする予定です。かなりオリジナルな解釈が入っています。吸血鬼のこととか。そこんとこお願いします。呪文詠唱も多少がんばりますが、オリジナル呪文に関してはそれっぽい詠唱にします。

## オリジナルキャラ設定

名前

クリス・アルティミス・ウル・グランド

年齢

??? (1000年以上)

性別

男

身長

180cm

体重

70kg

スタイル  
オールラウンダー  
魔法剣士

得意属性

全ての属性

武器

月牙（刀：属性・光）

暗離（小刀：属性・闇）

双水（双剣：属性・水）

火天（槍：属性・火）

風華（針：属性・風）

地竜（大剣：属性・土）

影夢（クナイ：属性・影）

英知の魔導書

種族

吸血鬼（真祖）

二つ名

『人外の救済者』

『永遠の墮天使』

『孤独の賢者』

『異形の剣神』

『武神王』

始動キー

リック・レリック・ラル・レック

アビリティ

多種武術

我流武術  
忍術  
神鳴流  
東洋魔法  
西洋魔法  
古代魔法  
融合魔法  
空間魔法  
召喚魔法  
感卦法  
縮地  
虚空瞬動  
浮遊術  
闇の魔法  
天術

## プロローグ1

ある城の近くそこには一人の青年がいた。彼の名はクリス・アルテイミス・ウル・グランド。年は20歳前後。身長は180cmぐらいで髪は銀髪を腰まで伸ばし一纏めにしてある。瞳はオッドアイで左はきれいなシルバーで右はゴールドだった。かなり整った顔立ちをしていた。実は彼は人間じゃなかった。もう数えるのがめんどくさいくらいの時間をこの容姿で過ごしてきた。はっきり言って吸血鬼だった。つまり不老不死だ。しかし、吸血鬼とは言っても彼はあまり人間の血を飲んでいなかった。別に飲まなくても困らなかったからだ。彼が血を吸うのは1年に数回、それも一口程度だった。しかし彼は一人だった。所詮は吸血鬼。受け入れられるはずもなく、一人旅をしていた。そして今、彼の歯車は狂い始めた。

「う〜ん・・・。匂いがするからこの辺だと思っただけだなあ。」  
彼は同類の匂いがいたのでこのあたりを散策していた。その時近くの城から少女が飛び出してきた。その少女はドレスを着て、調った服装をしているが、服には大量の血が付いていた。

「お、あの子か。あの様子だとさっきなっただばかりか・・・。かわいそうに。よし！行くか！」

そう言って彼は少女を追って走り出した。

私はひたすら走った。服に血がついたままだがひたすら走った。こんな姿をしたあの男を殺し、城から逃げ出した。もうどれくらい走っただろうか。正直わからない。この体になって体力が増えたのかもしれない。あまり息切れはしていなかった。

「はあ、はあ。．．．．．ふうふう。．．．これからどうしよう。私．．．こんな姿に．．．。．．．うつ、ひつく．．．。い、いやだよ。こんなの．．．人間に戻してよお．．．。」

私は泣いた。知識として吸血鬼が不老不死なのは知っていた。その扱ひも知っていた。これから一人になってしまう。それがいやだった。しばらく泣いたと思う。泣きやんでからぼくくとしてしていると、

「泣きやんだか？」

「!!!??」

不意に後ろから声をかけられた。振り返るとそこには一人の青年がいた。思わず見とれてしまった。その整った容姿に。しばらくぼくくとしてしていると、

「おい、大丈夫か。」

「えっ、あ、はい。．．．．!!?」

声をかけられたところで気づき、冷静になった。自分の姿に。服は血まみれ、ぼくくとしていた口から見える尖った犬歯。普通の人間ならこれだけで気づくだろう。私が吸血鬼だということに．．．。そう思い、私は男を警戒した。

「おいおい……。そんな警戒するなって……。どうもしねえから。」

「そんな言葉信じられると思っていませんか？」

「まっ、そつだよな。その体になったらまずは人間を警戒しなきゃな。うん、上出来だ。」

そつ言った男に私は困惑した。ほぼ間違いなくこの男は気付いている。私が吸血鬼だということに……。

「???何を言っているんですか？あなたは。私は吸血鬼ですよ？」

「だからだ。吸血鬼は人から狙われる。だから身を守る必要がある。だからオレはそれをお前に教えてやる。」

「そつ言つて油断させる気ですか？」

「ん〜……。そつは言つてもなあ……。あつ、変装といえなかつた……。」

その言葉にまた私は困惑してしまった。変装？そんなものしているとは思えなかつた。吸血鬼になって感覚が敏感になつたのか、さまざまな違和感が感じ取れるようになっていた。だから違和感があれば気づくはずだ。その違和感がないのに変装？理解できなかった。

「よし、じゃあ信用してもらつたためにも。変装ときますか。《リック・レリック・ラル・レック……解けよ。偽りの姿。》」



そう男が言つと男は光に包まれ、少しして光が収まった。変装と言いつつ姿は変わってなかった。

「よし、これでいいな。どう？信用してくれた？」

「どこも変わったようには思えないんですけど……。」

「おっと、まだ変わったばかりだったな。気付かないのも無理ないか。……ほれ。これでどうだ？」

「!?!?」

そう言つて男は唇をぐいつと引つ張つた。そこにあつたのは……。

「おまえ、……その牙!」

そう、そこには私と同じ……鋭く尖つた牙があつた。

「そ、お前の同類かな。だからこそ助ける。オレは今までそうしてきた。御分かり？」

なにやら言つていた気がするが、正直考えるだけで忙しかった。吸血鬼？同類？私ひとりじゃない？そこまで考えたところで私は泣いてしまった。

「おい、聞いて……、ってなんで泣いてるんだよ!？」

「うつ、……ひつく……だつて、わたじ、もうずっと一人だと……おもつで、それでひとりじゃないっておもつたら……。ひっく……。。」

「そっか、そうだよな。・・・もう大丈夫だ。」

そう言って、彼は私を抱きしめてくれた。その温かさを感じながら私は泣いた。

## プロローグ2

SIDEクリス

うっくん、やっぱり最初はこうだよな……。ほとんどのやつが同じ反応だしなあ……。しばらく泣かせておくか。

数分後

「もう泣きやんだか？」

「……うん。」

そう言っつて少女は顔をこちらに向けた。そしてオレは微笑みながら、

「よし、じゃあ。とりあえず自己紹介な。オレはクリス。クリス・アルティミス・ウル・グランドだ。そっちは？」

「エアンジェリン。エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。」

「そうか。んんん……。じゃあ、キティだな！そっちの方がかわいし。それでいいか？」

「ええ、かまいません。」

「おいおい。敬語なんていやめてくれよ……。そんな柄じゃねえ

し。．．．いいか、キティ？オレとお前は数少ない同類だ。だからオレとお前はいわば家族だ。わかるか？オレはお前の父親であり兄であり家族だ。だから敬語はなし。オレのことはクリスマスでも、ウルでも、いいぜ。どうせならお父さんとかでもいいぜ。」

オレは冗談っぽくそう言った。言ったんだが．．．。

「お、とう．．．さん？」

「ん、まあ、家族でオレのほうが年上だからな。そうなるかな？」

「お父さん．．．。．．．。うん！！そう呼ぶ！！お父さん！！」

そう言ってキティは満面の笑みでそう言ってきた。

マジか！？今まで何度かそう言ってきたが．．．。ほんとに読んだやつは初めてだな．．．。まあ、悪い気はしないな。

「よし！じゃあ、自己紹介も済んだし、本題に入るぞ。さつきオレはお前に生き残るすべを与えると言ったのは覚えているな？」

「うん。覚えてる。」

「よし。まずは魔法世界で生き残るためには魔法を覚えなくてはならん。もちろん他の一般教養と言われるものを教えるぞ。．．．しかし、魔法だけではいささか不安だから．．．。ほかにスキルを教えよう。どんなのがいい？」

「えっと、んつと．．．。．．．。あつ！そうだ！！お人形がいい！！」

「ふむ、お人形……。となると、『人形使い（ドールマスター）』のスキルか。よし、それでいこう。ほかに適性があったらとっておきを教えてやる。……。あとは、教える期間について言うておくか。」

「期間??」

「ああ、期間だ。オレは過去に様々な吸血鬼の世話をしてきた。出会った吸血鬼がほとんどそうだが……。例外もいたな……。まあいいや。で、オレもずっとキティの世話をしているわけにはいかない。本来なら50年世話をしているんだが……。キティは100年世話をしてやろう。個人的に気に入ったからな。」

「100年……。100年たつたらいなくなっちゃうの!??」

「ん、まあ。……。そうなるな……。」

予想以上に食ってかかってくるキティ。

ん〜。やっぱ、お父さんっていうほど懐いたから離れづらいか……。

「いやだよ……。一人は……。一緒にいてよ。クリスう……。」

「そうだな、キティ。確かに一人はいやだな。オレもしばらくは一人だったころはある。だからこそ、もう一人のやつを作りたくない。吸血鬼の中でオレみたいなのをしているのは少ないだろう。だからオレはみんなの家族になる。だから分かってくれキティ。」

「うん……。わかった。」

そんな泣きそうな顔で言われてもなあ……。まあ納得してくれただけでもいいか。

「よし。わかったところで。100年間の旅へ出発だ!!」

そう言って、オレはキティの手を取って歩き出した。

100年後

「ふむ、もう100年か……。長いようで短いな。そうだなキティ?」

「ああ、そう……。だな。」

「おいおい、そんな顔するなって……。かわいい顔が台無しだぞ?」

「なっ!!?か、かわいいなど!!ごまかすな!!クリス!!」

そうは言うものの顔が真っ赤なエヴァ。

「ごまかしてなんてないさ。本音だね。しかし、お父さんからクリスって呼び方が変わって悲しいなあ……。素直なキティはどこへ行ったんだろうか……。」

「100年たつてもそんな呼び方してたら恥ずかしいだろ!!」

「そうかあ?そんなことないと思うけど・・・。」

「う、うるさい!!と言うか行くならさっさと行け!!」

うわっ!!ツンデレだ。しかし成長したなこいつも。

「じゃあ、行く前に。ホレ。」

そう言つてオレはポケットから一つの指輪を投げた。

「なんだ。これは?」

「これは魔法発動体だ。杖なしで魔法が使える優れもんだ。でも、オレみたいな高位の吸血鬼は発動体いらずだけだな。それはオレが昔使っていたやつだ。年代物だぞ?」

「もらつていいのか?こんな大事なもの?」

「ああ、そいつも使われた方がうれしいだろうからな。大事に使つてやつてくれ。」

「ああ、大事にするよ。」

そう言つて、キティは微笑んだ。それにオレは満足して、

「よし、じゃあそろそろ行くかな。」

そう言つて指を鳴らすと足元に転移魔法陣ができ、オレは光に包ま

れた。

「100年間、楽しかったぜ。オレたちは不死だ。またいつか会うこともあるだろう。それまで元気だな。じゃあなキティ。」

「ああ、またなクリス。」

そうエヴァが返事をしたところで、クリスは別の場所へ転移していった。残されたエヴァは空を眺め、

「また会おう。お父さん。」

そう呟いた頬には一筋の涙が流れていた。

数百年後

クリスは麻帆良学園に来ていた。この発端は数日前。1本の電話から始まった。



## 第1話

ある日クリスの携帯が鳴り響いた。仕事用とプライベート用二つあるうちの仕事用が鳴った。彼はNGOのAAAに所属していた。最初に吸血鬼であることを告げたが、過去にも様々な功績をあげてきたので特に問題はなかった。仕事用が鳴ったということは何らかの任務だと思い、携帯をとった。

「もしもし、クリスだが。」

「お〜、わしじゃ、わし。」

わしってどうよ、このじいさん……。

「いきなりかよ……。で、どうした爺さん？任務の依頼か？」

「ああ、そうじゃ。かなりの長期間なんじゃがいいかの？」

「まあ、気は進まんが。関東魔法協会の理事長からの直々のお願いじゃあねえ。ほかの依頼も入ってこないだろうし、やるよ。」

「ほお〜、やってくれるか。」

「ああ、やってやるよ。で？依頼って何だ？」

「ふむ、実はこの。うちの学園で教師をやってほしいんじゃよ。」

「なんだって？教師？……まあ、あんたが頼むんだから只

の教師じゃないんだろ？」

「ほおう。察しがいいのお……。実はそうなんじゃ。表向きは教師として採用し、裏では護衛と警備を頼みたいんじゃ。」

「護衛？じいさんのところにそんな護衛するようなやつでもいるのか？」

「ふむ、うちの孫と一人の少年なんじゃ。」

「孫？じいさんの孫っていうと……。ああ、関西呪術協会の長の娘か。確かすごい魔力を持ってるって噂の……。そっちはいいとして、少年って誰だ？」

「ネギ・スプリングフィールドじゃよ。今修行のためうちの学園で先生をやっておる。」

「!?なに!?あの出鱈目なやつの子息だと!?!?しかも先生!?!」

「おい、たしかそいつって……。10歳じゃなかったか？」

「ほお〜、よくしつとるのお。そうじゃ、10歳じゃよ。」

このじいさん平然と答えやがった……。労働基準法云々はじいさんの力だろう……。

「はあ、まあいいだろう。了解した。そっちに行ったらオレはどこに住めばいい？野宿ってことないだろ？」

さすがにいろいろ曲げているじいさんでもそれはないよな……。

なくてほしい。」

「それなら大丈夫じゃ。管理人室に住んでもらう。」

はい？管理人室？

「どこの？」

「もちろん女子寮じゃ。」

「はぁ……。普通のところを期待していたオレがバカだったよ。いだろう。1週間後そちらに向かう。文句はないな？」

「すまんのお。1週間後から頼むわい。」

「ああ、じゃあな。」

そう言って電話を切った。  
まさか、教師とはねえ……。ま、考えても仕方ないか。準備しませぬか。

1週間後

「ここが麻帆良学園か。広いな。さて時間もないし学園長室でも行きますかね。」

ゆっくりとオレは歩みを進めた。

そして学園長室。扉の前に来てノックをする。

「入っていいぞ。」

扉をあけ、中に入る。そこには学園長ともう一人いた。

「約束通り来てやったぞ。こうやって直接顔を合わせるのは久しぶりだな。タカミチもな。」

「ほっほっほ、そうじゃな。よく来てくれた。」

「ええ、お久しぶりです。クリスさん。」

「ああ。・・・で、いきなり質問だが。オレは何の教師だ？」

「おお、そうじゃった。主は長生きしとるし。社会でどうじゃ？ピツタリだと思っくんじゃが。あとはネギ先生のクラス、3-Aの副担任をしてもらう。」

社会かぁ。・・・ぶつちゃけ何でもいいんだが。

「まあ、それでいいだろう。了解した。」

そう話をしたところで扉がノックされた。

「失礼します。学園長先生。ネギです。」

「おお、ちょうどいい。入りたまえ。」

許可をもらうと、扉を開けて一人の少年が入ってきた。肩にはオコシヨが乗っている。

「こんにちは、ネギ先生。」

「あ、こんにちは。あの学園長先生。こちらの方は？」

「うむ、この人が前言った新任の教師じゃ。無論、わしらと同じ立場じゃ。」

「あ、この人が。どうもはじめまして。ネギ・スプリングフィールドです。」

「はじめまして。クリス・A・U・グランドです。聞いての通り魔法使いだ。」

「ん、クリスってえと……。」

「ん、そちらのオコジョ君は気付いたみたいだね。まあ隠しても仕方ないし……。話してもいいですよ？学園長。」

「いいじゃろうて。いずれは分かることじゃ。」

そのやり取りに？マークを浮かべるネギ先生。

「じゃあ、フルネームと二つ名から。クリス・アルティミス・ウル・グランド。一番有名な二つ名は『人外の救済者』かな？」

「げっ！？『人外の救済者』って言ったら……。」

「ふむ。完全に気付いたみたいだね。オコジョ君。そのとおり、二つ名通り、人外……吸血鬼さ。」

そう言つて微笑みかける。ネギ先生完全にフリーズ。しばらくして、

「ええええ〜〜〜!!?!?きゅ、吸血鬼い!!!」

「そつ、吸血鬼。．．．ん?どうしたのそんなに震えて?」

「い、いや。あの．．．あの。」

「あ〜．．．。オレつちから説明しませ。旦那。実は兄貴、先日吸血鬼と一悶着あつたんでさあ。それでちよつと．．．。」

「ああ、なるほど。ちなみに吸血鬼の名前は?」

「そいつの名前なら、エヴァンジェリンでさあ。」

「はい?エヴァンジェリン?エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル!?!」

「確かそんなフルネームだって気がしませ。知ってるんですか?」

「知ってるも何も．．．。ん。てことは。」

「じいさん知つてたな?」

「ほっほっほ。何のことじゃ?」

そのしらばっくれ方。知つてやがったな。

「はあ〜．．．。いきなり気まずすぎるぜ。」

盛大にため息をつく。その様子にネギが問いかけてくる。

「あの、エヴァンジェリンさんとお知合いなんですか？」

「ああ、知り合いだな。・・・オレが吸血鬼ってことは話したよな？」

「はい、先ほど伺いました。それと関係あるんですか？」

「大ありだね。ちなみにオレは真祖で、少なくとも見積もって1000年以上生きている。」

「ええええ！そんなに生きてるんですか！？エヴァンジェリンさんでも600年って言ってたのに。まさか、その時にいざこざが！？」

「いや、実は・・・育て親なんだ。あいつの・・・。」

「え？・・・ええええ！！？そ、育て親！？」

「やっぱ驚くよなあ・・・。なんせ『闇の福音』<sup>ダイクエヴァンジェル</sup>の育て親が目の前にいるんだもんなあ・・・。」

「100年くらいかな。キティが吸血鬼になったばかりの頃だな。拾って、魔法やら人形やら勉強やら。いろいろ教えてたな。」

「へえ〜・・・。すごいですねえ。ん、あの。キティってもしかして・・・。」

「なんだ。あいつのフルネーム知らないのか？エヴァンジェリン・

アタナシア・キティ・マクダウエルっていうんだぜ？」

知らなかったようで啞然とする。なぜかじいさんとタカミチまで啞然としている。

「2人までどうした？そんな顔して。」

「い、いえ。私もフルネームを聞くのは初めてなもので……。」

「実はわしもじゃ。」

「マジかよ。あいつ隠してたのか……。それなら知らなくて当然だな。」

「さすがは育て親って感じっスね。旦那。」

そんな大層なもんじゃないんだけどねえ。……っと、結構話してたけど時間大丈夫か？

「話はそろそろいいんじゃないか？結構いい時間だぜ？」

ちなみに時間は8：50。

「そのようじゃな。よし、ネギくん。クリス君を3-Aに案内してやってくれ。1時間目は社会じゃし、丁度ええじゃろ。」

「あ、そうですね。では、クリス先生。」

「ああ。じゃ、またな。じいさん。」



「うむ。あ、今日の夜じゃが。10時になったら世界樹広場に来てくれ。」

「了解。」

そう言って、片手をあげて学園長室を後にした。

## 第2話

### SIDEネギ

今はクリス先生と二人で3-Aに向かっている。少し前にうちのクラスに新しい副担任が来るって聞いて、準備をして今日くるみたいだ。ワクワクして学園長室に行つて、話を聞くと、僕と同じ魔法先生みたいだ。しかもあの有名な『人外の救済者』なんて。びっくりしたけど、さらに吸血鬼なんて……。もっとビックリしたよ。やっぱりエヴァンジェリンさんみたいに、ガタガタ。でも、エヴァンジェリンさんの育て親かぁ……。やっぱり苦労したのかな？でも、今はそれより、

「あの、クリス先生？」

「ん、ああ。別に先生はつけなくていいよ。」

「あ、はい。わかりました。あのクリスさん。聞きたいことがあるんですが。」

「なんだい。何でも聞いてくれ。」

「あの、やっぱりクリスさんも血とか吸っちゃうんですか？」

そんな僕の問いにクリスさんはキョトンとして、笑みを浮かべたあと。

「いや、オレの場合はちょっと特殊だね。年に数回吸えばいいんだよ。長年生きてるから平気になったのかな？」

「え？そんなんですか？てつきり僕はエヴァンジェリンさんみたいに頻繁に吸うのかと……。」

「ん〜、まあキティはたかが600年だもんなあ……。ずっと追われてたからそんな吸う機会とかなかっただろうし……。そもそも吸血鬼はそんなに血を吸わなくてもいいんだよ？」

「え、そんなんですか？それは初耳です。」

「まあ、知らなく当然かな。自分の能力を他人に教えるもんでもないしね。吸血鬼つてのはね、吸った血を魔力に変えることが出来るんだ。だから吸血鬼は魔力が高いんだ。」

確かにエヴァンジェリンさんも似たようなこと言ってた気が……。

「そうなんですか……。少し安心しました。エヴァンジェリンさんもそんなに悪いことしないでよかったんだ。」

「ずっと気になってたんだけど来てもいいかい？」

「はい、なんですか？」

「キティは何でネギ先生のこと襲ったんだ？」

「あ、それは何でも呪いを解くためだそうです。」

「呪？いったい何の？」

「えつと何でも、僕のお父さんが欠けた呪いみたいで……。」

僕はエヴァンジェリンさんの夢で見たことを話した。

「はあ……。何やってんだあいつは。まるで子供の喧嘩だな。」

その言葉に僕は苦笑いするしかなかった。

そんな話をしていると、3-Aの教室の前に来ていた。

「じゃあ、クリスさんは少しここで待っていてください。すぐ呼びますんで。」

「了解。」

返事を聞いて僕は教室に入って行った。教室に入るとやっぱり騒がしかった。

「はーい、皆さん静かにしてください。」

「あ、ネギ君！ネギ君！今日新しい先生が来るってホント!？」

「え！何で知ってるんですか!?まだ何も言ってますんよ?」

「ふっふっふ、ネギ君。私の情報網なめてもらっては困るよ。」

やっぱり朝倉さんか……。はあ、

「確かに今日このクラスに新しい先生が来ます。なので皆さん席に

ついでください。」

そう言うと皆さん席に着いてくれた。みんな席に着いたのを確認すると、

「は、クリス先生入ってきてください。」

その声をかけクリスさんの中に入れる。クリスさんが中に入ってきて、教卓のところまで来て、

「どうも、先ほど話にあつた新任教師、クリス・A・U・グランドです。宜しく願います。」

「なっ！！！！？？？な、なんでお前が！！！！？」

クリスさんが自己紹介をしたところで、声が上がった。その声の先には・・・エヴァンジェリンさんがいた。

## SIDEエヴァ

いま私は教室で机に突っ伏していた。正直学校などどうでもいい。なにせ15年通っている学校だ。ぶっちゃけ飽きた。一般的な勉強は500年も前にあいつから習ったし、もう分り切っている。いつもならサボっているところだが、あの坊やが授業に出るなどと・・・あゝ忌々しい！なんだあの一族は散々私をバカにしおつて。はあ・・・。一体いつまでこの学園にいればいいのだ・・・。あの馬鹿は呪いを解きに来ないし・・・。でもまあ、生きていくというだけま

しか。しかし、このクラスはうるさいなあ。寝れやしない。一体何の話だ？

「みんな、みんな！スクープ！このクラスに新しい先生が来るんだって！」

「それホント！？朝倉？」

「ホントホント。私の情報網にかかればこんなもんよ。」

「へえ〜。こんな時期に……。もうすぐ修学旅行なのにねえ。」

ふん、新しい先生ねえ。確かじじいが人員補充だと言ってたな。まあ、魔法使いだろうな。このタイミングは。使えるのかねえ、新任教師は……。ま、修学旅行に行けない私は関係ないけどな。たかが教師程度でこの騒ぎ。飽きないねえうちのクラスは……。お、坊やが来たな。近くにいた魔力は新任教師か……。魔力は小さいが気配があまりないな……。多少はできるということか。まあ、関係ないな。にしても眠い……。

ん、少しウトウトしていたようだ。新任教師がもういるようだな。

「どうも、先ほど話にあつた新任教師、クリス・A・U・グランドです。宜しく願います。」

！！？クリスだと！？その名で思い浮かぶのはただ一人。私が唯一すべての心を開け放ち、愛した人物。教卓のほうに目を向けると、そこにはヤツがいた。

「なっ！！！？？な、なんでお前が！！？」

思わず声をあげてしまった。クラスの全員が私の方を向く。しかし今そんなことは関係ない。私は椅子から思いっきり立ち上がり、ヤツのクリスのいるところに向かっていった。

### 第3話

SIDEクリス

教室に入るとクラスの大半がこちらを向く。クラス名簿でも確認したが、ホントにキティがいるよ。ほかにも黄昏の姫神子に裏世界で有名な龍宮 真名までいやがる。ほかにも多少使えるやつがいるみたいだな。しかし、キティかぁ……。久し振りだなあ。相変わらず朝は弱いみたいだな。船漕いでるし……。さて、自己紹介でもしますかね。

「どうも、先ほど話にあった新任教師、クリス・A・U・グラウンドです。宜しくお願いします。」

ま、こんなもんじゃない。質問増やして授業なくしてもいいくらいだし……、

「なっ！！！！？？？な、なんでお前が！！？」

お、キティがやっとこちらに気づいたな。震えてやがる。まあそりゃあそうか。500年ぶりだもんなあ……。む、こちらに来る！

「クリス！きさま、一体ここで何をしている！？」

「ん、なにして……。教師？」



おどけてみる……。げ、涙ためてやがる。まずつたな……。

「き、きさま。私がどれだけ……。」

「わかった、わかったから泣くな。」

ほら、いきなりの行動で周りが付いてきてないぞ……。事情を知ってるネギ先生ですらついてきてないぞ。

「泣いてない！！最初の100年ぐらいは我慢したさ。いつかひよっこり現れるんじゃないかと思って、でも貴様は来なかった。そのあとは必死で探したさ！！でも、見つからなかった……。私はあきらめてた。そして奴に喧嘩を売ってこのざまだ……。何のための数百年間だ！！」

あの〜、キティさん。いろいろと駄々漏れですよ？

「とりあえずわかったから、いろいろと駄々漏れですよ？」

「今はそんな……。！！！！？」

やっと気づいたか。見る、ネギなんか真っ青だぞ？仕方ない。

「《リック・レリック・ラル・レック……。奪え、この者たちの記憶を》」

そうオレが言うと、キティネギ以外のヤツのところに光る糸が伸びる。大半の生徒は頭に糸を付けるが、神楽坂 明日菜へ向かった糸は手前ではじけて消えた。頭に糸が触れたものはトロンとうつろな表情になる。

「えっ？ いったい何？ これ。」

「な、なんですか？」

「慌てるな。神楽坂はネギ先生のパートナーだったな？」

「えっ、そうですけど。」

マジックキャンセルっていうのはこういう時不便だよな……。

「いま、こいつが余計なことしゃべったから記憶を消しているんだよ。」

そう言ってキティの頭をぽかっと叩く。

「えう。……し、仕方ないだろ！ 私だって……。」

「ん、なんだって？」

「何でもない！！！」

そう言って自分の席に着いた。着いたところで、糸が消え、表情が戻る。

「あれ？ 私……。」

「なんだろ？ ぼけつとする。」

ふむ、やっぱり少し混乱するのは仕方ないか。

「おい、みんなあ！名前言ったが、質問ないのか？ないなら授業始めるぞ？」

そう言っつてやるとみんな現実に戻ったようにこちらを向く。そして、

「「「「かつこいい〜！！！！」」」」

一斉に叫びましたよ。瞬く間に周りは人の波。勘弁してくれ。

「ちょ、ちょっと待て！オレは聖徳太子じゃないから一つずつしか答えられん！順番に頼む。1時間目はオレの授業だから時間はある！とりあえず座れ！！」

そう言っつとみんなおとなしく席に座る。素直なんだか、そうでないんだか……。

「じゃあ、質問どうぞ。」

「私から。どこから来たんですか？」

「世界を転々としてたから決まったところはないな……。しいて言っつならヨーロッパかな？ハイ、次。」

「年はいくつですか？」

「一様、20になる。」

「何の教科ですか？」

「社会だ。」

「どこに住んでるんですか？」

「これからは女子寮の管理人室だ。学園長に管理人を命じられた。」  
などと質問が飛び交う。しばらくしてチャイムが鳴る。

「よし、じゃあ。チャイムが鳴ったので終了。号令はいい。あと、エヴァンジェリンと神楽坂、昼休みに職員室に來い。」

そう言つて教室を出ると、キティが追つてきた。

「おい！クリス！」

「なんだ、キティ？詳しくは昼休みに話すから今はおとなしくしてろ。」

「む、わかつた。絶対だからな！！」

「はいはい。」

返事をするときティは教室に帰り、オレは職員室に向かつた。

## 昼休み

職員室のオレの机の周りにはキティ、神楽坂、そしてネギ先生がいた。さて話し始める前に、パチンと指を鳴らした。

「???今何したの?」

「ん、ただの認識阻害魔法だ。今話している内容は周りには世間話程度にしか聞こえん。」

「へえ〜。便利ね。」

感心している神楽坂。ネギ先生は使えないのか?そう思ってネギ先生のお方を向くと・・・、感心していた。使えないらしい。はあ、とため息。

「さて、呼んだ理由はわかってるな?さあ、何でも質問してくれ。」

「じゃあ、まず。あんた魔法使いなの?」

「教師にあんたって・・・。まあいい、その答えはYESだ。」

「へえ〜・・・。あとは、朝あんたのこと見てエヴァちゃんがあるなってたけど、あれ何?」

「あんなとは何だ!!!?」

「はいはい。キティは黙ってようねえ。」

そう言ってキティの頭をつかみ黙らせる。そして神楽坂にネギに話した内容と同じものを説明する。

「はあ〜・・・。吸血鬼で、育て親・・・。なるほどね。わかったわ。エヴァちゃんがあることになる理由もね・・・。」

そう言つて神楽坂はキティを挑発する。キティは自分のしたことを思い出し、俯いてしまった。その姿はいつぱしの乙女だった。

「じゃあ、あと質問は？」

「えっと、最後にひとつ。今朝の糸みたいなやつ何？」

「ああ、あれは。記憶を奪い取る糸だ。まあ、要は忘却呪文だ。多少手を加えたが、もとは変わらない。」

「へえ〜、あれが……。」

そう言つて神楽坂はネギ先生の方を睨んだ。ネギ先生はバツの悪そうな顔をしている

「どうした神楽坂？何かあつたのか？」

「いえ、なんでもお……。あと私のことは明日菜でいいですよ。」

「そうか、ならいいんだが。よし、じゃあ。明日菜とネギ先生はもういいぞ。キティは残れ。」

そう言つて明日菜とネギ先生を解散させる。そしてキティの方を向き、

「久しぶりだな、キティ。」

「そうだな。500年ぶりか。」

「長いな。今まだどうだった？」

そう言つて、キティとしばらく世間話をした。もうすぐ昼休み終了というところで、キティの指に光る指輪を見つけた。

「その指輪、まだ持ってたんだつたな。」

「ん、ああこれか。これは外さんよ。死んでもな。」

「そうか。大事にしてもらつてうれしいよ。・・・おっと、割とい時間だな。教室に戻つて次の準備をしろ。」

「ん、もうそんな時間か。仕方ない、行くとするか。」

「っと、キティ。夜、お前のうちに行く。いつになるかはわからんが、深夜ごろだろう。いいか？」

「かまわん。好きにすればいい。」

「そつか、じゃあ。またな。」

「ああ。」

と短く返して、キティは職員室から出て行った。

そして、放課後になり、サプライズパーティーも終わり、3-Aのクラスのほとんどの奴らは名前で呼ぶことになった。そんなことがあり、夜が更けていった。





## 第4話

### 世界樹広場

そこにはたくさん先生の生徒がいた。数人が杖やらなんやらファンタジーなものを持っている。しかし誰も突っ込まない。ある意味それが今この場所での普通だからだ。そこに一人の青年がやってきた。

「で、じいさん。今日は顔合わせっただけじゃないんだろ？」

「フォッフオッフオ、察しが良くて助かるわい。一様お主の実力は知っておるが、新ためてというやつじゃよ。」

「なるほどね。かの有名な吸血鬼様の戦いがみたいってわけか……。いやな感じだな。」

「まあ、そういうなて。そうじゃな、相手はタカミチくんではないじやろ。」

そう言われたタカミチはイヤそうだった。

「え、僕ですか。まいったな。あなたと戦うとなんか虚しくなるんですよ……。」

「仕方ない。たかが十数年が1000年に勝てるわけないだろうが。」

ま、久々に揉んでやる。来い。」

「仕方ないですね。行きますよ。」

そう言つてタカミチはポケットに手を入れる。それと同時に拳圧が迫る。しかし驚くことなく素手で捌く。

「ふむ、腕を上げたな。居合い拳だったか？ガトウのようだぞ。」

「そんなことないですよ。僕なんてまだまだです。」

世間話をしながらでも繰り広げられている攻防は凄まじいものだった。周囲の人間は食い入るように見ている。

「ふむ、いいこと思いついたぞ。」

「いったいなんですか？あまりいい予感がしないんですが……。」

「何、大したことではない。」

そう言つてオレはポケットに手を入れる。それと同時に迫ってきた拳圧が前方数m先で弾ける。それを見たやつらは目を見開く。タカミチも例外ではない。

「居合い拳ですか。いったいあなたは何種類武術が使えるんですか？」

「ガトウに教えたのは誰だと思つてる？」

「そうでしたね。……それなら!?!」

そう言つてタカミチは左手に魔力をため、右手に気をためた。それを合成しようとして、

「遅い。」

その一言とともにタカミチの体の前に持つてきた手が弾かれ、横にそれる。そこから瞬動で近づき、足払いをして転ばす。そこで試合終了となった。

「はあ、まさか感卦法をする前に終わるとは思つてもみませんでしたよ。さすがです。」

「なに、あれは合成の時、隙ができるからな。それを見極めればたやすいよ。その隙をなくすために魔力や気の流れをスムーズにしなきゃな。」

そう言つてオレは一瞬で感卦法を完成させる。

「っと、まあこんな感じに。」

「はあ、それができるのはあなたぐらいですよ。」

やっぱりタカミチは落ち込み気味である。そんなタカミチを立たせ、学園長のもとへ。

「で、こんな感じでどうだ。」

「フオッフオッフオ、さすがじゃの。お主に勝てるものなんぞおらんのではないか?」

「さすがに公爵、大公爵クラスの悪魔になるとどうかはわからんな。」

「そんなもん誰も召喚せんて……。」

そうじいさんは苦笑いしながら言う。

「で、どうじゃ？皆の衆。文句はあるまい？」

そう言う学園長に全員が黙る。しかしそこに一人の空気を読まないヤツ参上。

「学園長！やはり、吸血鬼というのが納得できません。所詮は化物ですよ？」

かの、ガンドルフィーニだった。

「はあ……。お前も人種差別主義者か。今時はやんないよ？」

「だまれ！吸血鬼！」

「これ、ガンドルフィーニ君。よしなさい。」

「しかし、学園長。やはり納得できません。本国では戦績を上げているようですが、所詮は吸血鬼。人外のもんです。しかも彼は『闇の福音』の育て親だそうじゃないですか！」

その言葉にオレは反応した。

「キティがどうした？」

低くドスの利いた声で言う。何人かは雰囲気の違いに気づいたように、冷や汗を流す。しかし、ガンドルフィーニは興奮しているのか全く気付いていない。

「ん、なんと言った？」

「キティがどうしたのかと聞いている。」

「あの3-Aの吸血鬼のことか？まったくあの化け物と来たら、普段は魔力切れで役に立たないし、満月になれば問題は起こすし。邪魔でしかないね。一体どんな教育したんだ……。」

その言葉にオレはキレた。抑えていた殺気を噴き出させる。木々は揺れ、石はひびが入り、空気が張り詰める。殺気を出したとたん、周りにいた魔法生徒の大半が気絶し、倒れる。本来なら魔法先生が助けるんだろうが、周りを支配している空気に圧倒され、顔は青くなり、立っているのがやっとのようだ。

「若造。早死にしたいようだな？そこまで言ったんだ、覚悟はいいか？」

そう言ってガンドルフィーニに近づく。しかし、数歩のところまで学園長が前に出る。

「そこまでじゃ、クリス君。家族を愚弄された気持ちにはわかるが、手を出してはいかん。」

「ちつ。仕方ねえ。……でもな、若造。今度そんなこと言

つてみる。その時は容赦なく殺す。」

そう言つて、あたりに充満していた殺気を納める。それと同時に意識を保っていた奴らが地面に座り込む。学園長とタカミチは冷や汗ダラダラである。そんな二人を無視して、先ほどのさっきで意識を保っていた2人の生徒のところに行く。

「よつ、大丈夫か？悪かつたな、ビビらせちまつて。」

意識を保っていた2人、桜咲 刹那と龍宮 真名を労う。二人は息絶え絶えながらも、

「だ、大丈夫・・・です。クリス、先生。」

「あい、かわらず、すごい、殺気ですね。クリスさん」

「なに、年期の違いだよ。割と大丈夫そつで安心した。それなりの覚悟がなきゃ、耐えられないぐらい出したんだが・・・。強いな。刹那、真名。ゆっくり休めよ。明日に響くぞ。」

そう言つてオレはじいさんのもとに行つた。

「じゃあ、オレは帰るぜ。」

「お主、この状況どうしろというんじゃ？」

学園長の目線の先には地面に倒れる生徒と、へたり込んだ教師たちがいる。

「知るか。文句があるなら・・・、あそこでへばつてる、ガンダロ

君に言え。今回はあいつのせいだ。後始末をつけさせる。……  
・と思ったが、あそこの生徒二名とそこで寝ているシスター一人は  
連れて行く。うちのクラスの生徒だ。それ以外は知らん。じゃあな。  
「  
そう言っつて踵を返し、先ほどの二人のところに行く。

「こんなトコにいて風をひかれてもらっては困るからお前らとそこ  
のシスターは連れて行く。せめてもの情けだ。《風よ、彼のモノを  
》  
「  
そう言っつて刹那と真名、シスターを風の魔法で浮かせ、ゆっくりと  
寮のほうに歩いて行った。寮の前に着くと刹那と真名は歩けるよう  
になった。シスターは安らかな顔で眠っていた。

「殺気を受けた時の気絶でこのまったり感は何だ？ある意味大物だ  
な。オレは行くところがあるから、こいつ頼んだ。よろしくな。」  
そう言っつてその場を去ろうとしたら、刹那に呼び止められた。

「あ、あの。クリス先生。」

「ん、どうした？刹那。なんか用か？」

「はい、あの。稽古をつけてもらえないでしょうか？」

「ふむ、稽古。なぜそう望む？」

「いえ、あの。私は強くなりたくて、それでより強い人に稽古をつ  
けてもらえばいいと思っただんですが……。」

「なるほど……。守るためか……。」

ボソツと言ったのが聞こえたのか、刹那はビクツとした。正解って  
どこか。

「よし、それならいいだろう。でも、オレが教えるのは守る力だ。  
殺しをするためのものではない。守るにあたって殺すことまででく  
るだろうが、進んで殺すな。守りたいものを守るために力を使え。  
それだけは覚えておけ。」

「はい!!--」

「よし。いい返事。ん〜と。たぶん明日の朝は殺気のせいでは  
調子じゃないだろうから……。明日は休んで明後日から始める。  
それでいいな?刹那。」

「はい、それで構いません。」

「ん、そうか。じゃ。また明日な。刹那、真名。」

そう言って、今度こそキティの家に向かった。



## 第5話

### エヴァ宅

オレは今、リアルログハウスの前に立っている。しかも結構でかい。

「うむ、贅沢してるな。・・・さて、入るか。」

えっと、呼び鈴は・・・ないのかよ。仕方ない。

「おーい、キティ。来たぞ。」

そう呼びかけると扉が開いた。そこにいたのは・・・、

「いらっしやいませ。お待ちしておりました。クリスマス様。」

メイドだった。正確にはメイド型ロボットだった。

「えっと、君は確か。絡繰 茶々丸だよね？なんでここに？」

「はい。マスターの従者をやっております。」

「マスターってことは・・・。キティの？」

「はい、そうです。」

「なるほどね。で、キティは？」

「マスターならリビングの方でお待ちです。」

「そうか。じゃあ、行きますか。案内してくれる？茶々丸。」

「はい、ご案内させていただきます。こちらです、付いてきてください。」

「了解。」

そう言っただけで茶々丸はリビングへ向かった。リビングにはソファがあり、そこに偉そうにふんずりかえっているキティがいた。

「いきなり偉そうだな、おい。」

「ふん。別にいいだろ。」

そう言っただけで不機嫌さをあらわにする。

「すみません、クリスマス様。マスターは先ほどクリスマス様の声が聞こえるまで、心配でウロウロしていたのでクリスマス様が来られて内心ホッとしているのです。」

「なっ！？茶々丸、きさま！」

「へえ、そうなのか？キティ。」

「そ、そんなわけないだろ！！」

「証拠映像なら私のデータファイルに入れてあります。ご覧になりますか？」

「お、マジで？見る見る。」

「あ、おいやめろ！」

「ちなみに今朝のマスターがクリスマス様に泣きついている時の映像もありますか？」

「なっ！？茶々丸。いつの間に!？」

「あの時のマスターは私も初めてみました。」

「くっそ、やめろ茶々丸！やめないと。」

そう言っつてキティは茶々丸の背後にまわり、頭のねじを回した。

「まいてやる、まいてやる!!!」

「あ、ああ。そ、そんなに巻かれては……。」

「何やってんだ？お前らは……。」

オレはあきれてものも言えず、ソファアに座つてキティと茶々丸を傍観していた。しばらくして、

「はあ、はあ……。で、今日はどうしたんだ。少し前にお前の殺気を感じたが。」

「マジか？こんなとこまで来てたなんてなあ……。参ったな。」

「ふん、感覚に鋭いものでないと気付かんレベルだよ。結局のところどうしたんだ？沸点が高いお前が、殺気をまき散らすなんて？」

ふむ、本音を言ってもいいが……。めんどくさいことになりそうだな……。多少ごまかすか……。

「いや、ただな。世間知らずの教師がオレに喧嘩売ってきたからな。お灸をすえてやったただだよ。」

「はっ、お灸ね……。まあいい。で、この機会だ、聞きたいことがある。」

「ん、なんだ？言ってみる。」

ふう〜と一呼吸おいて、

「単刀直入に聞く。……。私の呪いは解けるか？」

「ああ。解けるな。」

「そうか……。ざんね……。今、なんと言った？」

「ん、解けると言っただんだ。」

「なに！？それは本当か！？」

そんなに驚くことか？まあ、15年だもんなあ……。仕方ないか。

「ナギの小僧のかけた呪いだろ？そのくらい解けないわけないだろう？」

「む、確かにそうだが……。で、解けるなら解け！！今すぐ！！」

「解くことはいいだろう。ただし、中学生まではいてもらう。」

「そのくらいかまわん！！所詮あと1年だ！よし解け！」

「そう急ぐなって、少し待て。呪いの具合を調べる。」

そう言つてオレはキティの頭に手を載せ。呪いを調べた。

ふむ、陣がめちやくちやだか……。隙間だらけだな。膨大な魔力でカバーしているのか……。

「ふう、なるほどね。」

「どうだった？あの馬鹿の呪いは……。」

「オレからしてみればこんなのはどうつてことない。陣がめちやくちやで隙間だらけだから容易いな。しかし、普通の奴がやると小僧の魔力に負けて呪いの部分まで届かん。だから解けなかつたんだろ。」

「なるほど……。あの馬鹿魔力め。」

「そう言つな。じゃ、解くぞ？解き方なんだが……。お前に直接魔力を注ぎ込んで呪いをつぶす。そのやり方なんだが……。」

「ん、どうした早く……。まさか？」

「気づいたか……。想像の通り……。キスだ。それもディープな……。」

キティのやつそれ聞いて顔真っ赤だぞ。意外に初心だな。

「それでいいならやるが……。やめるか？」

「か、かまわん！好きにすればいい……。別に都合いいとかそんな、ゴニョゴニョ……。」

「なんだって？」

「何でもない！！いいからやれ！存分に！」

そう言っでキティは瞳を閉じる。

「はあ……。んじゃ、いきますか。《リック・レリック・ラル・レック……。わが力、この者に与えんとし、異物を飲み込む力とならん》」

そう言っでオレはキティにキスをした。

「ん……。くっ、んちゅ。ん……。はあ、くちゅ……。ぷは。」

唇を離すと、二人の間に銀色の糸が伝う。キティは腰が抜けたのか、その場にへたり込む。

「はあ、はあ。気持よ……。じゃない！解放された気分だ。力が戻ってるぞ。むしろ増えている。」

そう言っただけではいるものの、眼はトロンとしている。

「当たり前だ。オレが直接魔力を注ぎ込んだんだ。増えないわけないだろうが。」

「ふっ、確かにそうだな。で、お前はその後どうする？この続きでもしていくか？」

そう言っただけで妖艶な笑みを浮かべる。それに対してオレは、

「していかねえよ。オレは帰る。」

「なっ！即答しなくてもいいだろうが!？」

「オレを魅了したかったらもっと成長しろ。」

「できるかあ〜〜!!私はもう成長しないんだよ!!お前も知っているだろうが!!」

「そうとも限らんぞ。ちなみにオレは吸血鬼になった時は中学生ぐらいだったぞ?」

その事実には驚くキティ。

「な!!!?貴様どうやって!?!」

「ん〜……。ぶっちゃけ魔法薬だな。材料、製法、すべてがS

ランク以上の難しさ。オレも成功したのは2、3回だ。ちなみにオリジナルだ。」

「作れ！！今すぐ作れ！！そして私によこせ！！」  
そう言っつて胸倉を掴んでくる。

「まあまあ、中学卒業までには作っつてやるよ。それまで楽しみにまっつとけ。」

「絶対だからな！！」

まあ、ホントはあと1個あるんだが。いきなり成長したら駄目だからな。我慢してもらおう。

「わかった、わかった。じゃ、オレは帰るぞ。」

「ああ、じゃあな。茶々丸、玄関まで見送れ。」

「わかりました。それで、あの・・・マスター。」

「ん、どうした？」

「はい、先ほどのキスシーンの映像データいかなさいますか？」

「なっ！！？まさか茶々丸？」

キティは茶々丸の方を錆びついた感じでギギギギと向く。

「はい、すべて映像データとして記録してあります。目を閉じると



「ころから、腰を抜かすところまで。全て。」

「消せ！！今すぐ消せ！！」

「了解しました。最重要ファイルに保存しておきます。」

「人の話を聞けえ！！」

そんなキティの絶叫を尻目にオレはログハウスを後にした。そして、満天の星空を眺めながら、管理人室に帰って行った。

## 第6話

翌朝

見慣れない天井、慣れてないベッド、新鮮なおい。

「ああ、新しい住まいか……。」

ようやく頭が覚醒して時計を見る。7:30。まあまあいい時間じゃない?……起きますか。ベッドから起き上がり、ひと伸び。なれないベッドで体がカチコチだ。

「さて、朝飯は何にしようかねえ。」

そう言っただけ。冷蔵庫を見る。……何もない。

「そう言えば来たばかりだったけ……。仕方ない。」

そう言っただけ。オレは空中に小さい魔法陣を書き、魔法陣の中心に手を突っ込む。すると手が肘まで別の空間に入り込む。

「ん〜……。何がいいかな……。お、卵発見。あとはパンと野菜を少しでいいか……。」

そう言っただけ。望みのものを取り出して魔法陣から手を引き抜く。この

魔法は《ワームホール異空間》という、オレのオリジナル空間魔法である。オレが考案、術式、形式等最初から最後まで自分で考えたものである。伊達に1000年以上生きてないよ？ちなみに誰にも教えてないから使えるのはオレだけ。ホントは非常用にいろいろ貯めて置いたんだけど、朝飯食わないと元気でないしなあ……。朝飯はトーストとスクランブルエッグと簡単なサラダで済ませた。現在8:00。丁度いい時間なので着替えて出勤。途中挨拶をされたので笑顔で返す。返したあと騒がしかったのは何でだろう？そんなこんなで職員室に行く。ネギ先生はまだみたい。授業の準備でもしますか。

「しつつかし、教師も大変だねえ……。こんな朝早くから。えっと今日の授業は……。3-Aが2時間目にあつて、3-Fが4時間目か……。あとはないから暇だね。」

そんなことを考えているとネギ先生が来た。

「おはようございますう……。。」

「どうしたネギ先生？」

「はい、また朝から明日菜さんに迷惑を……。。」

ああ……。なるほどね。しかもまたつてことはかなり迷惑かけてるんだね……。。

「うん、まあ……。気にするな。それより授業の準備でもしたらどうだ？時間もないぞ。」

「あつ！ホントだ！じゃ、クリス先生また。」

そう言っつてネギ先生は自分の机に向かった。

「さて、オレも続きをしますかね。」

作業にもどるオレ。そういやHRもあつたな……。

授業を飛ばして速攻、放課後。

とりあえず今日の分の仕事が終わったので、学園内を散策する。なんだかんだで来るのは初めてだしね……。というわけで体育館。運動好きとしては外せませんね。中に入るとボールの音。

「バスケか……。」

そう呟くと、一人の生徒がこちらに来た。

「クリスマスせつ！どうしたの？こんなところで？」

「裕奈か。いや、学園内を散策してた。」

「へえ〜。てつきり迷子かと思った。」

「オレを何だと思ってるんだよ……。」

そんな話をしていると、バスケット少女たちが集まってくる。

「ねえ、ゆーな。この人だね！ずいぶんカッコいいけど？まさか彼氏！？」

「えっ？ち、ちがうよ！うちのクラスの副担任のクリス先生だよ。学園を見学してるんだって。」

「へえ〜、この人が……。いいわねえ。ゆーなのクラスは……。ネギ先生もいるし、おまけにこんなカッコいい副担任なんて……。」

「そ〜そ〜。ずるいなあ、ゆーなばかり。」

「あ〜、うるさあい！ほら、もう練習もどろ！」

そう言われて渋々練習に戻る面々。練習にもどる前に裕奈が、

「先生はどうする？どうせなら練習見てく？」

「ん〜……。いや、ほかにも行きたいところあるし、今回は遠慮しようかな。」

「そっか。じゃ、またね、せんせっ！」

そう言っつて裕奈は練習に戻り、オレは体育館を後にした。今度はどこ行こうかなあ、とか考えているうちに世界樹広場に来てしまった。

「ん〜、相変わらずでかいな……。神木なんたらだっけ？忘れてた……。少し眠いし、枝あたりで寝るかな……。」

周りに誰もいないのを確認して、普通ならあり得ないジャンプ力で木の枝に乗る。そして夕日を眺めながら横になり、目を閉じた。案外すぐ眠気が襲い、闇へと落ちて行った。

## SIDE 過去の夢

短い眠りの中で懐かしくもあまり見たくない夢を見た。

魔法世界にある大きな建物の一室。そこには一つの台があった。台の上には一人の少年が乗っていた。まだ中学生くらいの少年で、髪は黒く、眼は青かった。少年の乗っている台には幾重もの魔法陣が描かれていた。周りにはローブを着て、杖を持っている魔法使いが何人もいた。少年は恐怖で震えているが、鎖で繋がれているため逃げられず、ただこれから行われることを待つしかなかった。そして、一人の魔法使いがしゃべりだした。

「これで20人目だぞ？いいが現成功してほしいものだな。」

「まったくだ。いい加減この作業にも飽きてきた。」

「そうだな。しかし今回の実験体はかなり成功率が高いぞ？」

「それも当てにならないだろ。今度は死なないでほしいね。」

死という言葉に少年は反応する。今まで同じ牢屋から多くの少年たちが連れて行かれたが誰も帰ってこなかった。少年は理解した。先に行った者たちはみんな死んでいると……。少年は自分に死期が迫っていると分りながらも生きることが諦めようとはしなかった。そして、実験は始まった。周りの魔法使いたちが呪文を唱えるにつ

れ、少年の体に激痛が走った。少年はもがき苦しみ、自分が変わっていく感覚を感じた。細胞が燃えるように熱く、内臓が弾けるようにうごめいた。歯が痛むのを感じた。目も抉られるように痛んだ。しかし少年は諦めなかった。生きたい。まだ生きていた。そう願いながら、意識を手放した。

S I D E o u t

「っ!!!?」

そこでオレは目が覚めた。息が荒れ、心臓の鼓動が速い。全身には汗が滴り、正直目覚めは最悪だった。

「はあ、はあ……。くっそ！久々に夢見が悪いぜ……。神木の上で寝た罰が当たったのかね……。」

軽口をたたくも、顔色はすぐれなかった……。あたりは少し暗くなってきたぐらいだろうか。部活帰りの生徒がちらほら見える。

「はあ……。今の時間は……。6:30か。少し気分を落ちかせてから動こ……。」

優しく吹く風を浴びながら、沈みかけた太陽を見ていた。しばらくして、汗も引き、気分も落ち着いていた。

「さて帰りますか……。ん？」

下に降りようと、周囲を確認するとやたら明るい場所があった。

「何か面白そうだし、行ってみるか。」

そう言つて、明かりのもとに向かつて言つた。明かりのもとに着くと、たくさんの人と路面電車があつた。路面電車には『超包子』と書かれた看板があつた。

「中華料理屋か……。どうせだし食つていくか。」

オレは路面電車のカウンターのところに向かった。カウンターに着くと知っている顔が店の中にいた。

「超と五月？何やってるんだ？こんなところで。」

「あ、センス。いらっしやいな。」

いらっしやいませ。クリス先生

店の中には超 鈴音と四葉 五月がいた。よくまわりを見ると、古菲と八カセ、茶々丸までいた。

「なんでいるの？」

「何でも何も、私は『超包子』の社長ネ。」

社長だそうですね。聞きましたか？いったいどうなつてんでしょかね、この学園は……。

「まあいい、細かいことは気にしないでおこつ。とりあえず何か食つか。」



「それがいいネ。細かいこと気にしたら負けヨ。」

何になさいますか？クリス先生

「そうだな……。まだよく分かんないから、とりあえず五月のお勧めでお願いしようかな？」

わかりました。少々お待ちください

そう言つて五月は厨房の方へ行つた。しばらくして料理が運ばれてきた。メニューは見た目ヘルシーな野菜の雑炊と春雨スープだった。

少し顔色が優れないようなので、食べやすいものを用意しました。なぜわかつたのだろうか？顔色はかなり戻つたはずだし。そんな素振りも見せていないはず……。そこら辺のやつよりよっぽど気がきくな。料理人の鏡だな。そう思いながら料理を食べていった。結論から言おう。かなりうまかつた。プロ顔負けである。

「すごいおいしかつたよ。そこら辺の料理よりよっぽど美味しかつたよ。」

ありがとうございます

「こちらこそ、おいしいご飯ありがとうございます。また来るよ。」

そう言つて、超包子を後にした。



## 第7話

自分の部屋に戻ってまずやったことは、荷物整理だった。荷物は引っ越しの際にまとめて自作の別荘『庭園』に入れておいたので、取り出すだけだった。ついでに食料も取り出して冷蔵庫に入れておいた。普段はこんなことしないが、いまさら買い物に行くのも面倒だった。今回は仕方なし。荷物整理も終わり、家具の設置も終わり、部屋の中はおしゃれ々々な感じになった。ところで、刹那に朝の修業の時間を言っていないことを思い出したので、刹那の部屋に行くことにする。刹那の部屋の前にきてインターホンを押す。すぐに返事が返ってくる。しかし返事は刹那ではなかった。ドアが開かれるとそこにいるのは、

「あれ、クリスさん。どうしたんですか？こんな時間に。」

真名だった。あゝ……。そういえば同じ部屋だっけ……。

「いや、刹那に用があつてな。」

「刹那に？ああ。修行の話か。それなら、刹那。お客さんだ。」

真名が呼ぶとすぐに刹那が来た。

「あれ、クリス先生。どうしたんですか？」

「いや、修行の集合時間を言っていなかったからな。」

「そう言えばそうでしたね。何時にするんですか？」

「その前にもう一度聞きたい。どうしても強くなりたいか？」

「はい。お嬢様を守るためなら。」

「そうか。わかった。じゃあ、7時にオレの部屋に来てくれ。投稿の準備とかも全部済ませてからな。オレのとおっておきを見せてやる。」

「7時ですか？少し遅いような気がしますけど。分りました。7時にそちらに伺います。」

「よし。遅刻するなよ？じゃ、おやすみ。刹那、真名。」

「はい、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。クリスさん。」

2人に挨拶して自分の部屋に帰った。部屋に帰っても得にすることがなかった。寝ることにした。明日の修業のことを思い浮かべながら、眠りについた。

## SIDE過去の夢

眠りに着くと夕方の続きを見てしまった。台の上には気絶した少年。その少年の周りにいる魔法使いのうちの一人が少年に歩み寄る。

「また失敗か……。いくら成功率が良くても死んでしまっただは意味が……。！？こいつ生きてるぞ！！」

「なに！？すぐに体を確認するんだ！」

周りの魔法使いが慌ただしく動く。歩み寄っていた魔法使いは少年の髪をつかみ、顔を上げさせる。

「うっ！！」

髪をつかまれた痛みで目が覚める。しかし、それを気にせず魔法使いは少年を調べる。

「どれ、生きているということは成功してるはずだが……。」

そう言っつて、少年の口をあけさせる。すると鋭く尖った2本の牙が見えた。

「成功だ！！ついにやったぞ！！人間や魔獣を越える存在、吸血鬼が！！……気分はどうかね、吸血鬼君。」

吸血鬼と呼ばれた少年は姿が変わってしまった。髪は銀色になり、瞳はシルバーとゴールドのオッドアイになっていた。口には鋭く尖った牙があった。こうして世界で最初の吸血鬼、クリス・アルティミス・ウル・グランドが誕生した。

吸血鬼になった日から彼は実験道具になった。3日に1度、死ぬ一歩手前まで血を抜かれ、その血は旧世界・魔法世界問わず、いろいろなところに売られていった。ときには傷つけられ、魔獣と殺し合いをさせられ、毎日死と隣り合わせだった。そんなある日、彼は動いた。自分を縛っていた鎖を引きちぎり、目の前の鉄格子を破壊し、牢獄の外に出た。外に出ると複数の魔法使いがいた。魔法使いは魔法で攻撃しようとしたが、詠唱する前に人外のスピードで近づかれ、あるものは首を切られ、あるものは腹を裂かれ、あるものは頭を握

りつぶされた。瞬く間に彼は研究所の魔法使いを皆殺しにして、研究施設、研究データを破壊し、闇の中に溶け込んで姿を消した。

## S I D E o u t

オレは静かに目を開けた。夕方につづいて、よくない目覚めだ。今は6：30だった。刹那が来るまであと30分。

「こんな化け物を師事しようとするなんてな……。修行の前に真実を話さなきゃいけないしな……。考えを改めるかもしれないな。その方が刹那のためかもしれないな。こんな化け物なんて……。とりあえずは刹那が来てからだな。」

そう言って起き上がり、顔を洗い。朝飯を食べ、刹那が来るのを待った。少ししてインターホンが鳴り、ドアを開けると刹那がいた。制服を着て鞆を持ち、竹刀袋に入った夕凧を持っていた。

「よく来たな。まあ入れ。」

「お邪魔します。」

そう告げて刹那を中に入れた。中に入ったら刹那が話しかけてきた。

「あの、クリス先生。部屋で修業するんですか？」

「いや、別荘です。」

「別荘ですか？」

まあ、いきなりじゃ混乱するよな……。百聞は一見に如かず。見せたほうが早いな。そう思い、部屋の隅にある直径30cmぐらいの瓶を持って刹那のところに行った。もちろん台座も忘れずに。

「これが別荘だ。」

そう言っただけの刹那の前に置いた瓶の中にはオアシスのようなところに巨大な城が立っていた。それを見せられた刹那は意味がわからないようだ。

「あの、この瓶詰のミニチュアがどうかしたんですか？」

「これはな。オレが作ったやつで、『庭園』って名付けたんだけど。中に入ることができるんだ。しかもこの中は外とは時間軸がずれていて、外での1時間はこの中での1日分なんだ。」

「そんなすごい物作ったんですか!？」

「そんな驚くもんでもないが、魔法世界に行けば店に売ってるぜ？ まあ、これだけ小型で中身が上等なやつは滅多にないし、値もはるからな。」

「へえ。便利ですねえ。」

「ま、そう言うことだ。時間も惜しいし、行くか!」

「はい!」

そう言っただけの刹那たちは庭園に入ってしまった。

「ここがオレの別荘、庭園だ。どうだ？いいところだろ。」

「そうですね。きれいなところです。」

「そうだろ？自信作だ！ここにいる間は自由に使っていていいぞ。まほう薬とか以外は……。あとこれのことは秘密な。うるさいやつらの溜まり場になっても困るし……。」

「はい、わかりました。」

「よし、じゃあとりあえず……。丸1日あるし、とりあえず中を案内してまわるっか。話したいことまあるし。」

「そうですね。お願いします。」

そしてオレと刹那はひたすら広い庭園内の城の中を案内した。昼になったところですべて回り終え、昼飯を作ってごちそうした。味は結構好評だった。食べ終わった後、話をすることにした。話をする前に服を着替えた。修行だし……。

「じゃあ、刹那。修行を始める前に聞きたいことがある。いいか？」

「はい。」

「じゃあ、ごまかさずに答えてくれ。刹那。お前は自分にとって重要な秘密があるか？」

「……。」



「どうなんだ刹那。オレはお前の口から聞きたい。」

「……はい。あります。一つだけ……。私にとって重要な秘密が。でも、それが修行と何の関係があるんですか？」

「これはオレの中での信頼関係の問題だ。」

「信頼関係ですか？」

「そうだ。お前はオレに稽古をつけてほしいと言ってきた。いわばこれは師弟関係になる。これはわかるよな？」

ゆっくりと頷く刹那。

「オレはいままでいろいろなやつを弟子にしてきた。キティ、エヴアンジェリンもその一人だ。その中でオレは同族、つまり吸血鬼相手には無条件で信頼を置いて育ててきた。それには理由もあるんだが……。今は後回しだ。でもな、ほかの種族相手にはある条件を満たせる奴に信頼を置いて弟子にしてきた。」

「その条件は何ですか？」

「それはな。お互いの秘密を共有することだ。それも自分にとって重要な……。そこで、さっきの刹那の秘密だ。刹那はオレに自分の秘密を共有するだけの信頼が置けるか？」

考えるようにして黙り込む刹那。

「もちろん強制はしない。刹那が話したくなければオレはお前を信

頼まないが、修行はしてやる。でも、話すことになれば、オレの秘密もお前に話す。どうする？刹那。」

そう言うと、しばらく沈黙が続く。その沈黙を破ったのは刹那だった。

「……話します。……私の秘密を。」

「そうか……。今、話すか？」

「はい。今話します。」

そう言った刹那の眼に覚悟があった。刹那は立ち上がりテーブルから少し離れ、こちらを向いた。

「……これが、私の秘密です。」

そう言うと、背中から純白の大きな翼が飛び出した。

「見ての通り、鳥族と人間のハーフです。人間からしてみれば、化け物です。」

「そうか。よく話してくれた。でもな、オレは人間じゃないが。その翼を見てこう思う。……きれいだと。」

「!!!??」

翼に対してコンプレックスを持っていたのか、過剰に反応する刹那でもオレ続ける。

「刹那。確かにお前は普通の人間と違う。時にはそれを化け物と罵るヤツもいるだろう。でもな。きつとお前の仲間、そしてお前の大切なお嬢様はお前を受け入れてくれるはずだ。そのことだけは覚えておけ。」

「……はい。」

「よし、じゃあ今度はオレの秘密を話す。覚悟はいいか？」

「はい。お願いします。」

「まず、オレはある計画の唯一の成功例だ。」

「計画ですか？」

「そうだ。その計画の内容はな……。」

一息ついて、

「『吸血鬼を作り出す』これが計画の内容だ。」

「……?!?!?吸血鬼を作り出す？吸血鬼は自然に生まれるんじゃない？」

「表向きはそうなってるな……。だが実際はオレが始まりなんだ。」

「クリス先生が……始まり？」

「そうだ。オレはその計画で吸血鬼になり、さまざまな実験を受けてきた。その時にオレの血。つまり吸血鬼の血を大量に抜き取られ

た。何日もかけてゆっくりとな。」

「なぜ血を？研究のためですか？」

「まあ、一部はな。残りのオレ血は、旧世界・魔法世界問わずに売られたんだ。アホな野郎どもにな。オレは実験の中で様々な魔獣と戦ってきた。そして、その中でオレは強くなった。そして、オレは研究所を壊滅させて外に逃げ出した。」

「……でもその話と吸血鬼の始まりとどう関係があるんですか？」

「刹那は吸血鬼に噛まれるとどうなるか知ってるか？」

「！！！？まさかそれが！？」

「そのとおり。吸血鬼になるな。でも吸血鬼が生まれるのにはもう一つ方法があった。」

「もう一つの方法ですか？」

「その方法で生まれるのが、『真祖』と呼ばれる吸血鬼だ。」

「じゃあ、エヴァンジェリンさんもその方法で！？」

「そうだ。でも、あいつはその方法を知らない。」

「その方法は何なんですか？」

そう聞いてきた刹那に、オレは一息吐いて。



「それでも私はあなたを師事します。」

そうきつぱり答えた。

「そうか。わかった。……今からお前はオレの弟子だ。よろしくな刹那。」

「はい！よろしく願います！クリス先生。」

「あと、オレのことは先生つけなくていいぞ？何なら呼び捨てでもかまわん。」

「えっ、いや。あの……それはちょっと……恥ずかしいっていうか。……じゃあ、クリスさんと呼びます。龍宮もそう呼んでいいですよ。すし。」

「そうか。ならそれでいいか。じゃ、話も終わったし、稽古しますか！！」

「はい！願います！！」

ようやく、オレと刹那は完全な師弟関係になり、修行が始まる。

## 第8話

広場

話が終わった後、オレと刹那は城の前にある広場に来ていた。

「よし。まずは確認するが、刹那は神鳴流を使っただったな？」

頷く刹那。

「よし、じゃあ。使える奥義全部言ってくれ。」

「えっと、斬岩剣。斬鉄閃。斬空閃。百烈桜花斬。百花繚乱ですね。ほかにも体術がありますが。剣技はこれが全てです。」

「なるほどね。じゃあ、とりあえず……。えっと、《石の槍》」

呪文を唱えて、周囲に5本の石の槍を出した。

「奥義の数は5個だよな？じゃあ、1本にひとつずつ奥義をしていくってくれるかな？」

「はい。」

そう返事をして、1つの槍にひとつずつ奥義をしていって、すべての柱を切り終えた。

「終わりました。」

「ふむ、最低限の威力はあるようだね。でも、気の練りがまだまだかな。荒い部分を取り除けば、さらに威力が上がるよ。」

「気の練り、ですか？」

「そ、気の練り。今の刹那は確かに気を込めて奥義を使っていたけど、気の練り方が粗すぎて、手から刀にうまく気が伝わってない。今のは普通の石程度だったから切れたけど、もっと固いものならたぶん傷ひとつ付かないかな？何なら試してみる？」

「はい、ぜひお願いします。」

「よし、じゃあ。めちゃくちゃ上等なの行くよ。《リック・レリック・ラル・レック……冥府の石柱》」

今度は漆黒の巨大な柱を出した。

「さて、これはどうかな？夕風が折れることはないと思うけど……。気をつけてね。」

「そんなことにはなりません。」

あれえ……。少々ご立腹かな？やっぱ、自分の技をバカにされたらやだよねえ……。でも現実を知るのにはいいかな……。

SIDE 刹那



クリスさんの話を聞いて正直迷ったけど、私はお嬢様を守るために強くならなきゃいけない。クリスさんに付いていけば強くなれる気がする。だから私は稽古をつけてもらう。

稽古を始めたのはいいけど、いきなり駄目だしされた……。いい人だとは思うけど、正直いい気はしない。見返してやるためにできないと言われたことをやってやる。私はそう思い、1本の石柱に奥義を放った。

「神鳴流奥義 斬岩剣!!」

奥義を放った。申し分ない出来。しかし、私の奥義は石柱にはじかれた。

「なに!？」

「切れなかったね。どうせならほかのも試してみる？」

当たり前のように言われた。この言い方からしておそらくはほかの奥義でも切れなйдらう。だから私は聞いてみた。

「なぜ、なぜクリスさんは私の奥義じゃ切れないとわかったんですか？まるで私の奥義が未熟だとわかっていような感じでしたが……。1度見ただけでわかるものですか？」

「ん〜、それはね。まあ、ぶっちゃけ。オレも使えるよ。神鳴流てか、詠春に神鳴流教えたの、オレだし。」

「はい?」

私は正直耳を疑った。長に神鳴流を教えた？

「だから、刹那の未熟さがわかったの。OK？」

正直信じられないので、疑いの目を向けるしかなかった。

「む。その目は信じてないな？まあ、見た方が早いかな。動くのめんどくさいし、斬空閃でいつか。ちよつと夕凧貸して。自分のあるけど、同じ剣でやった方が平等だよな？」

クリスさんはめんどくさそうに言ったが、斬空閃はかなり難しいと思う。私でも不安定だし……。不安になりながらも夕凧を手渡した。

「神鳴流奥義 斬空閃。」

彼がそう言うのと剣から巨大な衝撃波が出て、石柱にあたり石柱は半分に分かれた。その光景に私は目を疑った。彼がはなつたのは間違いなく斬空閃だった。それも完璧といえるほどの威力だった。吸血鬼の力にしたって威力が違い過ぎる。夕凧を使いこなし、完璧といえる制度の奥義を放った。もう疑うことはできなかった。

「こんな感じかな？どう？信じてくれた？」

私は力なく頷くことしかできなかった。

「そんなに落ち込まなくていいよ。年期の違いってのもあるけど、体のスペックが違うからねえ。刹那も気の練り方と経験を積みめばできるようになるって。だから、がんばる？」

そつだ。こんなことで落ち込んでたらいけない！もつと強くなつてお嬢様をお守りしなくては。

「はい！お願いします！！」

「うむ、よろしい。じゃあ、さつき言ったけど。気を練る練習ね。とりあえず……。」

そつ言つと、クリスさんはどこからともなく筆と紙を取り出し何やら書いていった。

「これでよし。」

「あの、その札は何ですか？」

「ん、これ。これはね。」

そつ言つてクリスさんは私の額に札を貼つた。

「これはなん！！？」

額にはつた札を取ろうと手を動かそうとしたら、手が動かかなかつた。

「動かないでしょ？その札はね。封印術の一種でね。まあオレが考えたんでけどね。修行用なんだ。人相手にしか効果がないんだ。ちなみに動くためには、体にある気を練り込み、さらに体に平等に行き渡らせなきゃいけないんだ。練り込んだ気の量が少ないと動くのが大変だし、全身に平等に行き渡らせないと体は動かないし、まとも動くには両方ないとだめだよ。了解？」

「わかりました……。」

体が動かないのっていやだな……。

SIDEクリス

刹那の修業を始めて3時間。周りが暗くなってきた。刹那はようやく歩けるようになったぐらいだった。今日の練り込みはこんなもんな……。札を外してやる。

「まあ、奥義ばかりやって基礎を疎かにするとこうなるよ？」

「はい……。身をもって理解しました。」

「よろしい。この練習は毎日やるよ？基礎は大事だからね。」

「……。はい。」

「そんな落ち込むなって、慣れれば楽になるって。あと、いつも通りに動けるようになったら1段階アップした札になるからねえ。20段階まであるから頑張つてねえ。」

その言葉に崩れ落ちる刹那。そういえば詠春もこんな感じだったっけ……。

「だから落ち込むなって、基礎練習もするけど他もやるんだから次行くよ。」

「・・・はい。それで次は何をするんですか？」

「戦闘訓練かな。でも相手がちょっと特別かな。」

「特別ですか？」

「そ、じゃあ行くよ。《リック・レリック・ラル・リック・・・影よ・彼の者を映す鏡となれ。影の写し身》」

呪文を唱えると刹那の影が浮き上がり、刹那と同じ形になる。

「なっ!?!これは!?!」

「そ、戦闘の相手は自分自身。力も技も全く同じ。違うのは考え方のみ。その子は独自に考え独自に動くから出し惜しみなんてしてたら負けちゃうよ?その子は常に本気だから。死にはしないけど、怪我はするよ。覚悟はいい?」

「はい!お願いします。」

「よし。じゃあ、始め!」

掛け声とともに刹那と影の試合が始まった。

姿の同じ二人の剣士はお互いに技を打ち合った。しばらく剣のみで戦っていたが、影が翼を出し刹那を空中から攻撃してくる。刹那も翼を出し排撃するが、若干迷いがあるのか排撃が遅れて夕凧が弾かれ、奥義をくらい地面にたたきつけられる。刹那がたたきつけられたところに向かう。

「だから言っただろ?迷ってたらやられるって・・・。翼を出すの

に多少抵抗があるのはわかるが、オレたちしかないんだ。遠慮すんな。」

「はい、すみません。」

そう言っつて立ち上がろうとするが、痛みに顔を歪める。

「ん、怪我か。一体どこやっちゃまった。・・・肩に輝と、弾かれたときに指の骨がイってるな。しゃあない。《リック・レリック・ラル・レック・・・光の精・我の言葉に集いて彼の者の異常を取り除け・慈悲の光》」

そう唱えると刹那が光に包まれ怪我が治った。

「すみません。お手数をお掛けして。」

「気にすんな。よし、これで本気出さなきゃヤバいってことが分かっただろ？じゃ、2回戦言ってみよう。」

また刹那と影の戦いが始まった。

影との戦いは夜まで行われた。戦闘能力が同じなため、勝敗は五分五分だった。刹那は気の遣いすぎによる疲労のため修行が終わった後気絶してしまった。刹那が起きたら夕食にしようと思い、いつでも食べられるように準備は済ませてあった。しばらくして刹那が目を覚ました。

「・・・ん。ここは？」

「お、目が覚めたか。ここは城の中だ。お前は気の遣いすぎで気絶しただけだ。」

「そうですか。ご迷惑をおかけしました。」

「何、気にするな。修行の一環だ。そんなことより飯にするぞ。いい加減腹が減った。」

「あ、はい。そうですね。いただきます。」

オレと刹那は向かい合って一緒に飯を食い、食った後に戦術に関する座学を行い、眠りについた。

翌朝、オレは現実世界に帰る2時間前に目を覚ました。ただ起きているのも暇なので軽く稽古をすることにした。無手に始まり、一刀流、二刀流、槍術、武術、忍術を1時間ほど稽古していた。終わったところで後ろに声をかけた。

「のぞきはあまりいい趣味とはいえねえぜ。刹那。」

そう言っただけで後ろを見ると、バツの悪そうな顔をして刹那が立っていた。

## SIDE 刹那

朝、目覚めると疲れはすっかり無くなっていた。昨日の夜寝る前に飲んだ魔法薬の効果だろうか……。クリスさんのお手製だと言っていたが、伊達に長生きはしていないということか……。そう思

いながら体を起こし、伸びをする。そのあとクリスさんを探しにうつろつくことにする。広場の前を通ったところでクリスさんを見つけた。剣の稽古をしているようだった。私はその稽古に見惚れてしまった……。その動きは舞を思わせるほどしなやかで、それでいて力ずよく、美しかった。しばらく剣の稽古を似ていると、ほかの武術もやるようだ。ずっと見ているといろいろな武術を行っていた。剛を思わせる力強い動きもあれば、柔を思わせるなめらかな動きもあった。その動きはどれも達人のそれだった。新ためて1000年という歴史を感じた。ようやく終わったようだそうしたら不意に声をかけられた。

「のぞきはあまりいい趣味とはいえねえぜ。刹那。」

のぞいていたことに多少の罪悪感を感じてしまい、少し焦ってしまった。

「い、いつから気づいてたんですか？」

「お前が見ていた時からだよ。たまに視界に入ったしな。」

少しだけ顔が熱くなるのを感じた。見惚れていた時の顔はどんな顔だったかどうか？そう考えると恥ずかしくなってくる。黙り込んでいる私を見て、クリスさんは

「まあ、気になったのは仕方ないけどよ。声くらいかけてほしいかな。」

「はい。次からはそうします。」

「ん、よろしい。じゃ、朝飯にするか。もうすぐ戻る時間だからな。」



「

「はい。」

そう答えてともに食堂に向かった。食堂についてクリスさんが朝食を作り、それを食べている時ふと疑問に思ったことを口にした。

「そう言えば、朝稽古を見ていて思ったんですが。クリスさんはいくつ武術を使えるんですか？」

「うん？たくさんありすぎてキリがないが、メジャーどこで行くと・・・。お前の使ってる神鳴流とか、タカミチの使ってる居合い拳とか、キテイの使ってる合気道とかだな。ほかにも中国拳法とかどこぞの空手の流派とかいっぱいあるな。伊達に長生きしてないぜ。」

「ホントそうですね。正直反則だと思えますよ。」

心の底からそう思った。この人に勝てる人はいるのだろうか？・・・考えないことにした。

食事も終わってしばらくして私たちは現実世界へ帰って行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0065h/>

---

無類の吸血鬼

2010年10月13日14時50分発行